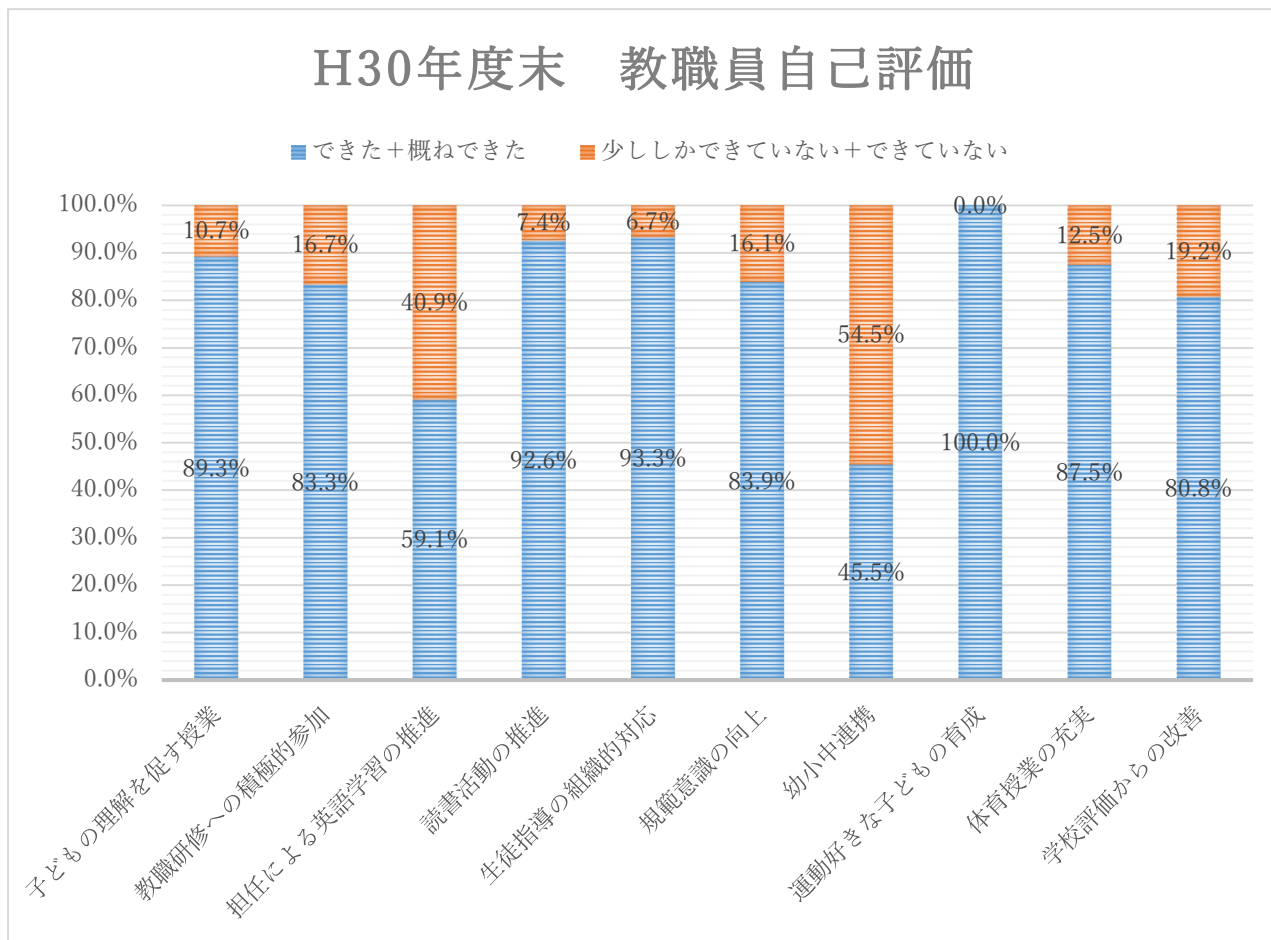


<H30 年度末 教職員自己評価>



平成 30 年度末の教職員自己評価は、平成 31 年 2 月 4 日に実施しました。評価項目は平成 30 年 7 月 17 日から 20 日に行った中間期評価と同じです。中間期の評価やそれについての反省をもとに、2 学期と 3 学期に何に取り組んだか、また、どのように取り組んだか、どれだけ取り組めたかを評価し、次年度の学校運営に活かすことが、年度末評価の目的です。

奈良県の学校教育の目標、「知（確かな学力の育成）」「徳（豊かな人間性の育成）」「体（たくましい心身の育成）」をもとに、生駒市では「生駒を愛し、21 世紀を生き抜く力を身につけた、優しくたくましい子どもの育成」を教育目標に掲げ、小学校では 9 つの重点課題が設定されています。9 つとは①主体的・対話的で深い学びの充実、②読書活動の充実、③情報モラルの向上、④心の居場所となる学級づくり、⑤グローバル時代に対応した英語教育の推進、⑥道徳教育・特別活動の推進、⑦規範意識の醸成、⑧自尊感情の醸成、⑨保幼小中の連携 です。本校の教育重点目標や重点課題は、それをもとに設定したもので、詳しくは学校ホームページをご覧ください。

では、「知」「徳」「体」「学校運営」のそれぞれで教職員自己評価の結果を見ていきたいと思ひます。

1、自ら学び、自ら考える子の育成

『『分かった』『分かりやすかった』と子どもが感じるような国語や算数の授業を実施する』という達成目標に対し、教職員の89.3%が「できた」「概ねできた」と回答しましたが、これは中間期の96.9%より下がっています。中間期の結果を見て、学校評価委員から「本当に先生方は分かりやすい授業を行っているのでしょうか?」「教員同士が授業を見合い、指導力を高めることが必要だと思います。」との意見が出たことは、教員が自分の授業を客観的に見直すきっかけになりました。2学期以降に行った公開授業は国語や算数ではありませんでしたが、すべての授業に共通する授業のスキルを学ぶことができました。

「教職員の研修に積極的に参加する」ということについては、83.3%の教職員が「できた」「概ねできた」と答えています。中間評価では52.9%でしたので、30ポイント以上増加しました。これは、夏休み等研修する時間が確保されていたこと、そして、教員自身が「研究したい」「研修したい」と日頃から思っていた教科等の研究大会の開催が運動会以降に集中したためだと考えられます。研修の時間を確保することが、いかに大切なことがよく分かりましたので、来年度も長期休業中の研修を推奨しようと考えます。

中間期の自己評価から、早急な改善を求められていたのが「学級担任による英語学習の推進」です。中間期、「できた」「概ねできた」の回答は34.6%でしたが、年度末には59.1%と24.5ポイント上昇しました。これは夏季休業中に行った校内研修の成果だと思います。「これならできそうだ」「学級担任による英語学習はこんな楽しいものだったのか」という思いを強く持てたことで、教員は英語学習に積極的になりました。再来年度からは英語学習、外国語活動が本格的に始まりますので、それまでに教員一人一人の英語（外国語）授業力をまだまだ高めなければなりません。

「ボランティアによる読み聞かせを活用し、子どもの本への興味関心を高め、図書室の貸出冊数を伸ばす（読書活動の推進）」について、中間期は77.8%、年度末は92.6%の教職員が「できた」「概ねできた」と答えました。しかし、「子どもは家で本を読む習慣がついている」と感じている保護者の割合は54.0%しかありません。これは教師の期待値と保護者の期待値に大きな差があるためだと思います。各学年で読書生活の目当てとなる指針を保護者に知らせることが先決だと思いました。平成31年2月12日までの年間貸出冊数は1年生 4213冊、2年生 2594冊、3年生 3391冊、4年生 3770冊、5年生 2490冊、6年生 1290冊、全校で17748冊でした。

2、他人を思いやる温かい心と感動する豊かな心をもつ子の育成

「不登校等の生徒指導上の問題を特支・通級担当者とも協議し、未然予防や早期発見に努める（不登校等生徒指導上の問題への組織的対応）。」については、中間期81.8%、年度末93.3%の教職員が「できた」「概ねできた」と回答しました。10月から1月までの4か月間でケース会議（警察関係者、教育委員会、心理士などの専門家等と学校関係者で、事案について対応を協議する会議）は19回行い、いじめアンケートについても毎学期実施しています。教師間や関係機関と連携し、学級で学習できるようになった児童もあり、今後もこのような組織的対応は続けていかなければならないと思っています。

「してもいい事とやってはいけない事の判断ができ、特に廊下歩行の決まりを守れる子どもを育てる（規範意識の向上）」については、83.9%の教職員が「できた」「概ねできた」と答えました。しかしながら、中間期の調査では91.2%でしたので、7.3ポイントの減少です。子どもたちの廊下歩行について

は昨年度と比較して改善されたと感じますが、注意を受けた時の態度や言葉遣い、チャイムを守る意識についてはまだまだ改善していかなければならない課題です。また、友達と一緒にになった時に善悪の判断がブレてしまうことについても指導を徹底していかなければならないと感じています。「少しは良くなったが、規範意識や人権意識の向上が進んでいない。課題を出し合い、目標を高く持ち、全職員で取り組むことが必要だ。」という意見が教職員の中にもありますので、生徒指導部が中心となって次年度も目標を決めて取り組みたいと思います。

「幼稚園や保育所、こども園、または中学校との円滑な接続」について、「できた」「概ねできた」と回答した教職員は45.5%にとどまり、中間期の40.0%からわずかしこ上昇していません。幼稚園や保育園と交流した1学年と5学年、中学校と交流した6学年は校種間交流を意識した取り組みを行うことができましたが、交流しなかった学年については「できることをもっと考えていかなければならない。」という声があがりました。年度当初に各学年で「何ができるか」を考え、計画的に推進することが次年度の課題です。

3、健康でたくましい子の育成

「なかまとともに楽しみながら運動する子どもを育てる（運動好きな子どもの育成）」の項目には、教職員全員が「できた」「概ねできた」と答えました。最近の子どもたちの様子を見ていますと、寒い日でも小運動場は鬼ごっこや縄跳びをする子どもたちでいっぱいですし、下の運動場ではキックベースボールが人気となってきています。「みんなで（大勢で）外で遊ぼう」と先生方が声をかけ、先生も一緒に遊びに興じる姿をこのところはよく見ました。

「体育の授業研究で培った知識やスキルを活かし、自信をもって授業を行えるようになる（体育授業の充実）」という項目には、87.5%の教職員が「できた」「概ねできた」と答えました。中間期より6ポイント高くなっています。児童アンケートでも88.2%の子どもが体育授業に満足しており、本年度の本校の研修の成果が出たように思いました。特に、2週間に1度来校する体力向上コーディネーターに定期的に指導を受けたことで、どの教員も体育授業の技術、授業のノウハウを得たと思います。教員が体育授業に自信を持ったことで、子どもも教師も体育授業が大好きな学校になったことが非常にうれしいです。

4、評価を活かした学校運営

「児童の様子やアンケート、学力テスト等の分析と考察を行い、丁寧な自己評価からの学校改善をめざす（学校評価制度の推進）」に「できた」「概ねできた」と答えた教職員は80.8%で、中間期の54.8%から26ポイント上昇しました。これには学校評価委員会の役割が大きかったと思います。学校運営の状況を資料、そして授業や行事の子どもたちの様子、また、家庭や地域で見せる子どもの言動から冷静に分析し、教職員の自己評価が正当なものかどうかを議論いただきました。そこで出た意見を教職員に知らせたことは、「教師の自己満足な授業ではなかったか」とか、「子どもの心を精一杯理解した指導だったか」と教師自身の自分の言動を見直すきっかけになりました。また、学力調査、スポーツテスト、児童アンケートや保護者アンケート、いじめアンケート等の調査の分析結果は、日頃の学級経営や学校運営、授業に活かすことができたと思います。